

令和元年6月24日現在

機関番号：32429

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H07068

研究課題名(和文) 東日本大震災で心のケアを行う宗教者の倫理的アイデンティティの形成について

研究課題名(英文) On the formation of an ethical identity of religious persons to spiritual care in the Great East Japan Earthquake

研究代表者

山田 牧子(Yamada, Makiko)

日本保健医療大学・保健医療学部看護学科・助手

研究者番号：30800792

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 700,000円

研究成果の概要(和文)：この研究では、東日本大震災以降、苦悩に寄り添い生きる力を支えようとする、キリスト教徒と仏教徒のボランティアらの、それぞれの宗教者としての倫理観・責任感に基づくケア実践のプロセスを明らかにすることで、臨床における多様な価値観の中での適切なスピリチュアルケア実践のための倫理的配慮と技術に関する理論構築を目的とした。異なる文化や価値観にあつて相手に共感していこうとする深い出会が宗教者、被災者の双方に相互浸透しながら、開かれた新たな関係を構築するという変化をもたらした。宗教者は内面的変化と、成長、また共に生き続ける、という使命を生きていくアイデンティティの再構築をもたらしていた事が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

急速に進む多死社会を迎え、地域で生きる人々の終末期に至るまでの生活をどのように支えていくのか、人間的な死をどのように迎えるべきなのか、本人やその家族が病気や苦難に立ち向かえる様に支援し支えることが、大切になる。死に向き合ったり新たに人生の意味を構築し直す時に、その人のスピリチュアリティを支えていく事が回復には必要である。死生観を含めたケアを行う際の、異なる宗教性、価値や信念を持つ人々へのケアにおいて、お互いを疎外し合わない、新しいコミュニティの価値を造り出し、支援者と被支援者双方が相互浸透しあえるような、実践が必要である。その様なスピリチュアルケア実践に応用できる研究として意義がある。

研究成果の概要(英文)：Christian and Buddhist volunteers who have tried to support their ability to live in distress since the Great East Japan Earthquake. In this study clarify the process of care practice based on their sense of ethics and responsibility as their respective religious figures. The purpose of this study was to build a theory on ethical considerations and technology for appropriate spiritual care practice sought in clinical values. The deep encounter sat in different cultures and values, and brought about a change in building open new relationships while mutually instilling in both supporters and people who have been supported. It has been revealed that the religious person has brought about a change in the inside, and the reconstruction of the identity which lives in the mission of growing and living together.

研究分野：死生学分野

キーワード：東日本大震災 スピリチュアルケア 文化的多様性 宗教性 倫理 内的成長 アイデンティティ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、「日本で求められるスピリチュアルケアに関して、「スピリチュアルケア実践者のための内的成長について」をテーマにした博士論文の重要な一部を成すものである。

東日本大震災では、苦悩にある人々を支えようと震災直後から様々な宗教関係者が宗教や教派を超えて支援に入り、布教目的ではない、弔いや悲嘆ケア等のスピリチュアリティに配慮した支援活動を行っている。研究者は被災地を訪れる中で、支援活動を行っている宗教者と出会った。宗教者のボランティアは、継続的に支援を行い、全く違う宗教性を持つ人々とも、頼りになる友人として良い関係が築かれていた。

宗教者の主な支援範囲は、追悼行事・義援金の送付、支援物資の配布、瓦礫撤去・清掃、被災者の受け入れ、傾聴カウンセリングなど多岐に渡っている。また、宗教宗派を超えた災害支援のネットワークが生まれ、心のケアのニーズから宮城県宗教法人連絡協議会によって「心の相談室」が開設され、心のケアにあたる傾聴活動などが行われた。(藤山 2011)。このような東日本大震災での宗教者の活動は実績とともに評価され、新聞やメディアでも多く取り上げられた。被災地のニーズとその活動を踏まえ、2012年には臨床宗教師を養成しようと東北大学大学院文学研究科実践宗教学寄附講座が設立された。

これまで宗教者は、自死・貧困・無縁社会といった社会的問題に対し社会貢献活動を行っており(稲葉・櫻井 2009)(白波瀬 2015)、宗教の社会活動・福祉活動は社会的にも注目されてきている。

人間は誰でも突然に、死や病、障害といった人生の危機に遭遇することがある。支援の中でも、死に向き合ったり、障害や病を抱えながらも、希望や力、困難の中での意味や価値、目的を見出すプロセスに寄り添っていく、スピリチュアルケアが重要になってくると考える。何かの宗教を信じているかに関係なく、人は何かを契機に自己を超えた、「意味」を探し求めることがある。スピリチュアリティは人間の生きる希望や力や本質であり、人生の困難な過程に意味や価値、目的を見出すことを援助するために核心となってくるものである。

### 2. 研究の目的

苦悩の中、主体としてスピリチュアルな問いを探求していくのは本人である。スピリチュアルな問いの探求は「リカバリー」と通じる。リカバリー(回復)のプロセスとして、つながり、将来への希望、楽観視できること、人生の意味、そしてエンパワメントを含んでいる(Leamy et al 2011)。そこには、自律・意志決定支援・リフォーメーションの支援が必要となる。支援者が基本となる自らの信条に基づいて相手の文化に入る場合、異なる文化の「価値体系」の違いで様々な問題が生じる。特に宗教者の活動ではしばしば、「押しつけ」が問題となる。そこに必要な倫理的配慮は何であるのかを明らかにする必要がある。

この研究では、苦悩に寄り添い、生きる力を支えようとするキリスト教徒と仏教徒のボランティアの、それぞれの宗教倫理に基づくケア実践のプロセスを明らかにする事を目的とする。臨床における多様な価値観の中での適切なスピリチュアルケア実践のための倫理的態度と技術に関する理論構築を行う。

### 3. 研究の方法

本研究では宗教者からのインタビューを質的帰納的に分析した。研究対象者は今回の研究では、震災後7年目の時点で被災地で継続して心のケア等の支援にかかわっている、仏教・キリスト教の宗教者とした。対象者を宮城県宗教法人連絡協議会による「心の相談室」、「東北大学大学院文学研究科実践宗教学寄附講座」、「NPO 法人東北ヘルプ(仙台キリスト教連合被災支援ネットワーク)」などの実践運営に関わっている方に、紹介していただいた。

倫理的配慮として、紹介された対象者に、研究方法、データの収集方法を書面と口頭で説明した。また、インタビューは自由意志により決定できる事、拒否・中断により不利益を生じないこと、撤回可能なことを説明し同意を得た。個人情報取り扱いについては個人が特定できないようデータの匿名性を担保した。データは本研究以外には使用せず、鍵のかかる場所に保管した。

分析には、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)(木下 1999)を用いて分析を行った。M-GTAを選んだ理由は、データに根ざした分析を基本に、主に人と人との関わり合い(社会的相互作用)に関する理論構築をめざす質的研究のアプローチであるからである。M-GTAでは得られたデータから概念を生成し、概念間の関係について検討し理論として提示する。

### 4. 研究成果

インタビューデータの分析により概念が生成された。作成された概念の関係図は図1の通りである。

(「」は概念、〔 〕は中心概念、— は概念間の関係を表す。)

中心となる概念は、〔自らのハイブリット性の発見〕の概念である。

“異文化にであう中で、異質だと思ったものが自分の中で両立しえることを見出す。”と定義した、〔自らのハイブリット性の発見〕という中心概念が見出された。

「東日本大震災で被災した高齢者に寄り添い、支援を行った宗教者がアイデンティティの再構築をしていく」プロセスのストーリーラインは以下の通りであった。



図1 「自らのハイブリッド性の発見」プロセスの概念の関係

支援者は、「異文化クロス体験」に遭遇したが、「どんなお手伝いがいりますかの精神」、「相手の目線になって理解する」、「素の自分で語る」ことを実践し、その中で、「バックグラウンドの再探求」をし「考えを訂正拡張」し、そのなかで「自らのハイブリッド性の発見」があった。それによって「共に生きていける関係」に至るといふプロセスが見出された。

研究からは、支援者が相手の文化、価値観を知ろうと徹し、また自分の「バックグラウンドの再探求」の作業の中で、自分自身とその価値観を厳しく探求し、自分の考えを訂正したり拡張したりすることで、自分の価値観を押しつけることなく多様な価値や信念、スピリチュアリティに関する相違点や類似点を見出しながら「共に生きていける関係」を創りだしていった。支援者が「相手の目線になって理解する」事に徹する姿勢の中では、被災者が生の意味や死生観などスピリチュアルな問いに悩み、求めて来るときもあるかもしれない。そのようなニーズがあるときには、対話の中で支援者の持つ宗教性を伝え、語ることはありえるだろう。「宗教の最も重要な機能の一つは人生過程を人々に理解させること、それによって人間のアイデンティティを形成・維持することにあると思われる(宇都宮 2005)。」また、世界中の民族や文化、宗教が生物学的な死を、人間のいのちの終わりとはせずに、「死後の世界」「魂」「霊」という彼の世のイメージを物語として伝承してきており、それらの文化は現在も地域ごとに物語として人々の生活の中に色濃く残っている。実際、東日本大震災後の被災者のスピリチュアルリティに関する体験のルポルタージュや報告は多く見られる(奥野 2017)(リチャード 2018)。「心理学的に見れば、霊魂や死後の世界のイメージは、ライフ(いのち・人生・生活)観とかかわり、目に見えない聖なるものを恐れ敬う気持ちや倫理観と連動する。さらに共同体の伝統や死者の記憶を次の世代に伝え、過去の世代と将来世代の子どもたちを世代を超えて結びつける生成継承性(ジェネラティブティ)の働きをする(やまだ 2010)。」死やどうにもならない理不尽な思いに寄り添っていく時に、宗教の持つ伝統に裏打ちされた、スピリチュアルな問いに答える、自らや人生を支える物語がそこにあるかもしれない。疾病構造の変化や、少子高齢化が進み、在宅医療が推進されるなど、医療介護・福祉・保健体制が転換を求められている社会において、科学的に身体を回復させる治療から、人間の生死を全人的に支えていく、QOLの実現のために、全人的医療を担う一端として、宗教者が臨床にたつニーズと意義がそこにあるのではということが示唆された。

また、価値観を共有できる新しい関係を築いていくためには、素の自分であるという、勇気のある誠実さと「どんなお手伝いがいりますかの精神」でいるという、あくまでも相手を主体とする共感的な関わりが必要である事が示唆された。また「押しつけ」という様な一方的な支援に陥らないためには、相手の目線にたち、誠実さと共感が基礎にある関係作りのプロセスが必要である事が示唆された。

理論生成をして行くに当たり次のような視点が必要と考える。「異なる文化や価値観にあって相手に共感していこうとする深い出会が宗教者、被災者の双方に、相互浸透しながら、開かれた新たな関係を構築するという変化をもたらした。それは宗教者にとって内面的変化と成長、また共に生き続ける、という使命を生きていくアイデンティティの再構築をもたらしていた。」

日本では、急速に進む少子高齢化、多死社会を迎え、エンドオブライフケア等を含む地域包括ケアシステムの議論はさかんである。地域において、老いや障害、病をかかえて生きる人々の終末期に至るまでの生活をどのように支えていくのか、人間的な死をどのように迎えるべきなのか、多死社会へ突入する日本の社会の中で、個人やその家族が病気や苦難に立ち向かえる様に支援し苦難の意味を見出す事を支える(トラベルビー2006)といったことが、大切な要素と

なってくる。アメリカの National Cancer Institute のでは、スピリチュアリティについて「しばしば宗教的な感情や心の安寧、人生の目的、他者とのつながりに関する個人の意識、および生の意味に関する信念である。」と定義される。浜渦(2005)は QOL におけるスピリチュアリティの側面をどう捉えるのかという事を論じる中で「日本のようにキリスト教的な伝統がないところで、スピリチュアルケアから宗教的色合いがぬぐい去られ、「どんな人にもできるケア」になっていった時、ある大切な一面が剥奪されて行ったのではないか。」とも述べている。世俗化した日本社会の中でのスピリチュアルケアのあり方については、さらに模索していく必要があるが、公共性を持った宗教者の活動が、人生の苦悩に寄り添うケアとして、現代社会に寄与する可能性があることを、今回の成果からも示唆された。死生観を含めたスピリチュアルケアについての活動を展開する際の、異なる宗教性、地域文化性、価値や信念を持つ多様な人々へのスピリチュアルケアにおいて、文化の違いを超えて、お互いを疎外し合わない、新しいコミュニティの価値を造り出し、支援者と被支援者双方が相互浸透しあえるような、実践が必要である。それらの背景と文脈の中で、今回の成果をもとに、その様なスピリチュアルケア実践者に応用し活用できる理論生成につなげていきたいと考えている。

#### 引用文献

- 稲葉圭信著編・櫻井義秀編(2009)社会貢献する宗教 世界思想社  
宇都宮輝夫(2005)人生物語としてのスピリチュアリティ 湯浅泰雄監修 スピリチュアリティの現在 人文書院 263頁  
奥野修司(2017)魂でもいいから、そばにいて 3・11後の霊体験を聞く 新潮社  
木下康二(1999)グランデッド・セオリー・アプローチ質的実証研究の再生 弘文堂  
白波瀬達也(2015)宗教の社会貢献を問い直す ナカニシヤ出版  
トラベルビー著 長谷川浩 藤枝知子訳(2006)人間対人間の看護 医学書院  
浜渦辰二(2005)魂のケアについて - 仏独・ホスピスとスピリチュアルケア研修報告 人文論集 56(2)  
やまだようこ(2010)この世とあの世のイメージ 新曜社 4頁  
リチャード・ロイド・パリー著 濱野大道訳(2018)津波の霊たち 3・11 死と生の物語 早川書房  
Leamy M. Bird V. LE Boutillier C, et al (2011) Conceptual framework for persona recovery in mental health: systematic review and narrative synthe. Br J Psyshiatry  
藤山みどり(2011) 宗教情報センター <https://www.circam.jp/reports/02/detail/id=1998>  
2019.06.24 閲覧  
National Cancer Institute (U.S.A) <https://www.cancer.gov/search/results2019.06.24>  
閲覧

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計 1件)

山田牧子、東日本大震災被災高齢者の支援にかかわった宗教者らのアイデンティティ再構築のプロセス～スピリチュアルケア実践者のための内的成長についての研究～  
第34回日本保健医療行動科学会学術大会、2019年

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：

取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。